

國學院大學学術情報リポジトリ

条件表現の全国分布に見られる経年変化：
予測的条件文の場合

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 三井, はるみ メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000949

条件表現の全国分布に見られる経年変化 —予測的条件文の場合—

三井 はるみ

キーワード：タラ テカラ 接触変化 体系変化 単純化

1. はじめに

本稿では、約30年間隔で行われた2回の方言分布全国調査である『方言文法全国地図』（GAJ と略称する）と「全国方言分布調査」（FPJD と略称する）の結果を比較し、順接仮定の条件表現（以下これを「条件表現」という）について、全国的な変化の動向の概観を得ることを目的とする。今回は、基本的な順接仮定条件文として、予測的条件文を取り上げる。

2回の調査の概要は表1のとおり。

表1 『方言文法全国地図』と「全国方言分布調査」の概要

	方言文法全国地図（GAJ）	全国方言分布調査（FPJD）
調査実施	1979-1982 年	2010-2014 年
地点数	807	554
話者（原則）	1920(大正 9)年以前生まれの移住歴のない男性，各地点 1 名 調査時 60～75 歳	1940(昭和 15)年以前生まれの移住歴のない男女，各地点 1 名 調査時 70 歳以上
調査項目数	文法，表現法 267	音声，語彙，文法 211
質問法（文法）	共通語翻訳式	
スタイル	話者自身が，くつろいだときや，ごく親しい人と話すときに使うことば	
条件表現項目	21	12
刊行物	国立国語研究所(1989-2006)	大西拓一郎編(2016)
データ	http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj_all/gaj_all.html	http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/fpjd/fpjd_index.html

2. 方言の条件表現の全国分布概観

条件表現は、複文の前件と後件の二つの事態の仮定的な因果関係を表す表

現である。共通語の基本的な形式は「ば」「たら」「と」「なら」の4形式であり、そのほかに「ては」を加えることができる。これらの形式は、それぞれ中核的な意味を持ちつつ、互いに用法が重なり合いながら使い分けられている。

方言の条件表現形式の全国的な地域差の概略を表2に示す。GAJの分布図と、GAJで調査されなかった2用法については、FPJDとGAJの準備調査の結果から、本土方言に見られる語形と分布を整理したものである（日高2003, 2017、三井2009, 2010参照）。以下に調査文を示す。

- ・GAJ 128図「きのう手紙を書けばよかった」（反事実的条件文）
- ・GAJ 167図「あした雨が降れば船は出ないだろう」（予測的条件文、文末：述べ立て）
- ・FPJD G-049「そこに行ったら電話しろ」（予測的条件文、文末：命令）
- ・GAJ 169図「おまえが行くとその話はだめになりそうだ」（予測的条件文、後件が望ましくない事態で文全体が〈回避の必要性〉の伝達の意味）
- ・GAJ 225図「そっちへ行っちゃいけない」（予測的条件文、文全体が〈禁止〉の伝達の意味）
- ・GAJ 133図「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」（認識的条件文）
- ・pre-GAJ 表152「あの人の家に行くと、いつもごちそうしてくれる」（総称的条件文）
- ・GAJ 170図「そこに行ったらもう会は終わっていた」（事実的条件文）

方言の条件表現では、方言特有の形式は、中部（愛知県、岐阜県）等の「トサイガ」、九州（佐賀等）の「ギー」、東北北部の「タバ」「タツケ」などがあるものの、本土では全体に見ても多くない。目立つのは、共通語で類義関係にある「バ」「ト」「タラ」「ナラ」の形式が、一つの用法の中でそれぞれ固有の地理的領域を持って分布している点である。共通語と同じ形式でも、方言によってカバーする用法の範囲や、構文的・意味的制限のありようが異なることがわかる。地域別に見ると、東北北部では「バ」が、近畿から四国にかけての地域では「タラ」が、それぞれ広い用法で用いられることなど、各地方言の体系の一面がうかがわれる。

表2 条件表現形式の全国的地域差（本土）

			九州南西部	中国・四国南西部・九州北東部	近畿・四国北東部	関東・中部	東北南部	東北北部
反 事 実 的	128図 書けば	バ	カケバ	カケバ		カケバ	カケバ	カケバ
		タラ			カイタラ			
		ト	カクト※1				カクト	
		ナラ	カクナラ※1					
		他	カクギー※2					
予 測 的	167図 降れば	バ	フレバ	フレバ		フレバ	フレバ	フレバ
		タラ			フッタラ			
		ト					フルト	
		ナラ	フルナラ※1					
		他	フッギー※2					
	FPJD G-049 行ったら <文末: 命令>	バ						
		タラ		イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ
		ト						
		ナラ	イッタナラ※1					
		他	イクギー※2 イッタトキ※3	イッチカラ※4				
	169図 行くと <避けた い後件>	バ	イケバ	イケバ※5		イケバ※7		イケバ
		タラ			イッタラ			
		ト	イクト	イクト	イクト	イクト	イクト	
		ナラ						
		他	イクギー※2			イクトサイガ※8		
	225図 行っては <禁止>	バ						イケバ
		タラ			イッタラ			
		ト	イクト					
		ナラ						
		他	イクギー※2	イッチャー		イッチャー	イッテ	
認 識 的	133図 書くなら (Nは準 体助詞、 形式名 詞)	バ		カケバ※6				
		タラ						
		ト						
		ナラ	カクナラ カクNナラ	カクナラ カクNナラ		カクナラ カクNナラ		
		他	カクギー※2		カクNヤッタラ	カクダラ カクNダラ カクジャー※9	カクNダラ	カクNダラ カカバ※10 カクカラ※11
総 称 的	pre-GAJ 表152 行くと	バ	イケバ	イケバ		イケバ		イケバ
		タラ			イッタラ			
		ト	イクト	イクト		イクト	イクト	
		ナラ	イクナラ※1					
		他	イクギー※2			イクトサイガ※8		
事 実 的	170図 行ったら	バ						
		タラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	イッタラ	
		ト						
		ナラ						
		他	イッタレバ※1 イタギー※2					イッタバ イッタツケ イッタレバ※12

※1 熊本等
※2 佐賀等
※3 鹿児島等

※4 大分等
※5 山陰等
※6 高知等

※7 長野等
※8 愛知・岐阜等
※9 山梨

※10 岩手等
※11 秋田等
※12 岩手・山形等

- ・ 国立国語研究所編『方言文法全国地図』（GAJ）、同「方言文法全国地図の準備調査結果」（pre-GAJ）、同「全国方言分布調査」（FPJD）から、条件形式を地域ごとに整理して示した。主な形式に網掛けを施した。
- ・ 地点数は少ないがある程度まとまった分布をなす形式には※を付して表下に主な使用地域を示した。
- ・ 「-バ」にはカキヤー等の融合形を含む。その他も同類の違いはまとめている。

このような条件表現全体の広がりの中で、本稿では予測的条件文「あした雨が降れば船は出ないだろう」(GAJ167／FPJD G-045)を取り上げる。予測的条件文は、前件の未実現の事態が実現した場合に生起する結果を後件に述べるもので、もっとも典型的な条件文である。さらにこの調査文は文末が推量表現の平叙文であり、共通語でも各地方言でも、使用できる条件表現形式の制限が生じにくいことが知られている。このような意味で、今後ほかのタイプの条件文との比較を行う上でのベースになるものと考えられる。以下では、このタイプの予測的条件文を「基本的な予測的条件文」と言うことにする。

以下、3節でGAJとFPJDの分布の比較を行い、4節でそこに見られた「タラ類」の増加を接触による伝播・受容と見る場合の留意点について整理する。5節で4節の整理に基づいた分布の解釈を行い、6節では、同類の変化が言語内的変化として進行中であると見られる、九州の「テカラ類」の用法拡張のプロセスについて考察する。7節はまとめである。

なお筆者はこれまでに、三井(2009, 2010)でGAJ所収の順接仮定条件表現項目の全国分布を概観し、三井(2016)でGAJとFPJDの項目ごとの簡略な比較を行っている。本稿では一つの用法に絞ってより詳細な比較を行うとともに、方言の条件表現の体系全体の変化の方向という観点を念頭に置いて考察を行う。

3. 基本的な予測的条件文を担う形式の経年変化

図1にGAJ167図の略図、図2にFPJD G-045の地図を示す。

まず図1でGAJの分布を確認する。主要な語形は「フレバ」「フリーヤ」(バ類)と「フツタラ」(タラ類)である。「フレバ」が東北から関東東部にかけてと九州南西部に分布し、その融合形である「フリーヤ」等が中部地方と中国・四国南西部・九州北東部に分布、そして、近畿から四国にかけて「フツタラ」が分布する。バ類は北琉球にも分布する。バ類とタラ類は周囲分布を成し、タラ類が発生的に新しいことがうかがわれる。文献国語史上も、関西方言では近世後期以降バの使用が減少し、タラが増加していることが指摘さ

- ▲ フレバ類
フレバ・フェバ・ブリバ・
フィバ・フリワ 等
- ▲ フリヤー類
フリヤー・フリヤ・フレアー・
フラー・フヤー・フレー・フイレー 等
- ▽ フラバ類
フラバ・ブラバ・ブラボー
- ▽ フルバ
- ↑ フットラ類
フットラ・フトラ・フッター・
ツフチャラ 等
- ♀ フットラバ
- フルト類 フルト・フット 等
- フルナラ類 フルナラ・ファンナラ 等
- フルンナラ類
フルンナラ・フットナラ 等
- フル[準体助詞/形式名詞]ダラ類
フルゴツタラ・フツコンダ・フルヨダラ 等
- ♠ フルンダバ類
フルゴツタバ・フルゴツダバ
- ㄥ フルンヤツタラ
- Υ フツチャー類 フツテア・フツチャー
- † フルトキ・フットキ類
フリユントウキヤ・フットトキヤ 等
- ∩ フツギー類
フツギー・フリギリヤ・フルギット・フツタギリ
- ✕ フイネー類 フイネー・フイネー
- ㊦ フーティカー類
フティカー・フズィティガー・
フーズィツカー・フティカラー 等
- * その他
- ℵ 無回答



図1 あした雨が降れば船は出ないだろう (GAJ167図)

- ▲ フレバ類
- ▲ フリバ類 フリバ・フリワ・ブリボー 等
- ▲ フリヤー類
フリヤー・フリヤ・フヤー・フレ・フイラー 等
- ▽ フラバ
- ▽ フララバ類 フララバ・フラーバ
- ▽ フーバ
- ↑ フツタラ類
フツタラ・フッター・フーチャラ 等
- ♀ フツタラバ
- └ フツタバ
- Υ フツタレバ
- フルト類
- フルナラ類 フンナラ
- フルンナラ
- ▣ フツタンナラ類 フツタンナー
- ▤ フルダラ類 フンダラ
- ▥ フルゴツタラ・フルゴツタバ類
- ∟ フルンヤツタラ
- ∟ フツタトシタラ
- Υ フツチャー類 フツチャー・フツチャ
- ▼ フルンデワ類 フンデワ
- ♀ フツチカフ
- ↑ フツタトキ類 フツタトキヤー
- ∪ フツギー類
フツギー・フーギー・フルギラ・フイギーニヤー 等
- ∪ フイキー
- ❖ フイネー類
フイネー・フイネ・フイニーヤ・フーイナ
- ❖ フーティカー類
フューティカ・フティカラ・フーチガー・フツカラ・フツカー・フツシカー・ツフイタカー・フルツカー
- ❖ フイガシヤ
- ・ その他



図2 あした雨が降れば船は出ないだろう (FPJD G-045)

れている（金澤1998、矢島2013）。この他、南東北の山形県、福島県では、「フルト」（ト類）が他の語形との併用が多いながら集中している。ほかに、数は少ないがある程度まとまった分布を示す語形としては、秋田県・山形県の「フルNダラ（主に「フルゴッタラ）」、佐賀県等の「フッギー」、熊本県等の「フルナラ」、沖縄本島等の「フィネー」、南琉球の「フーティカー」が見られる。

図2のFPJDでは、主な形式のまとまった分布は大きく変化していない。その中で違いが見られるのは、①タラ類の増加と、②南東北におけるト類の減少をはじめとした同一地域内の形式のバリエーションの減少である。タラ類の増加は、近畿地方を中心とした西日本と、東北地方南部から東関東にかけての東日本の二つのエリアに見られる。予測的条件文においては、②は①の結果として生じている面が大きいので、以下は①を中心に述べる。

周囲分布の圏央にある近畿・四国地方のタラ類は、周囲論的解釈によれば、周辺方言への伝播による分布域の拡大が予測される。両図を比べると、GAJのタラ類の分布域に接する次の地域に、FPJDでは新たにタラ類を使用する地点が見られるようになっている。タラ類は近畿地方から周囲へ拡大していると言える。⁽¹⁾

- (A) 北陸地方（福井県・石川県・富山県）
- (B) 三重県北部から愛知県西部
- (C) 京都府北部から鳥取県
- (D) 瀬戸内島嶼部・沿岸部
- (E) 福岡県

ただし隣接地域でも、兵庫・岡山県境、滋賀・岐阜県境にはタラ類を使用する地点は広がっていない。一方、GAJでのタラ類分布域の内部に着目すると、タラ類とバ類を併用していた近畿地方周辺部（三重県、奈良県等）と四国地方では、バ類の使用地点が減少し、FPJDではほぼタラ類専用となった。近畿地方を中心とした地域においては、その内部と隣接地域で、タラ類がバ類に代わって受容されるプロセスが進行している。

次に、東日本を見る。GAJでは、バ類とト類の密な分布に隠れて目立ちにくく、まばらな分布であるが、FPJDでは、東北地方南部から東関東にかけ

での太平洋側に「フツタラ」「フツタラバ」のタラ類が、バ類、ト類との併用で広がっていることがわかる。ただし、近畿・四国地方の分布と異なり、分布の中心と見なせるような、タラ類が優勢な連続した範囲は見出しにくい。GAJでタラ類が分布している地域（特に、宮城県、福島県、栃木県）は、FPJDではタラ類の使用地点が増えて、バ類、ト類等の使用地点が減少している。また、両者の分布領域を比較すると、GAJでタラ類が使用されている地域に接する次の地域に、FPJDでは、新たにタラ類を使用する地点が見られるようになっている。

- (a) 宮城県北部・岩手県南部
- (b) 山形県内陸部
- (c) 福島県浜通り
- (d) 栃木県西部
- (e) 千葉・埼玉・東京都県境

この傾向を明瞭に把握するために、GAJ、FPJDそれぞれについて、宮城県、福島県、山形県の各語形の、調査地点数に対する割合を図3として示す。⁽²⁾宮城県、福島県はGAJでタラ類が使用されている地域、山形県はFPJDでタラ類が拡大した地域である。宮城県では、GAJですでに「フレバ」と「フツタラ」+「フツタラバ」（タラ類）がともに半数程度を占めていたが、FPJDではタラ類がさらに増加し7割以上となった。福島県では、GAJでは「フレバ」が6割で最も多く「フルト」が続いていたが、FPJDではこれらはいずれも減少し（「フレバ」は半減、「フルト」は三分の一に）、「フツタラ」+「フツタラバ」（タラ類）が宮城県同様7割以上となった。山形県では、GAJでは「フルゴツタラ」（図1の凡例では「フル{準体助詞／形式名詞}ダラ」類）が過半数、「フレバ」「フルト」がそれに続いていたが、FPJDではこれらがいずれも減少して（特に「フルゴツタラ」は激減して1割弱に）、「フツタラ」が「フルト」とともに多く使われるようになった。

ここからタラ類増加の傾向がはっきりと読み取れるとともに、福島県のト類、山形県のゴツタラ類⁽³⁾といった、GAJでは優勢な地域特有の語形が、FPJDでは衰退に向かっていることがわかる。東北地方南部から東関東にか

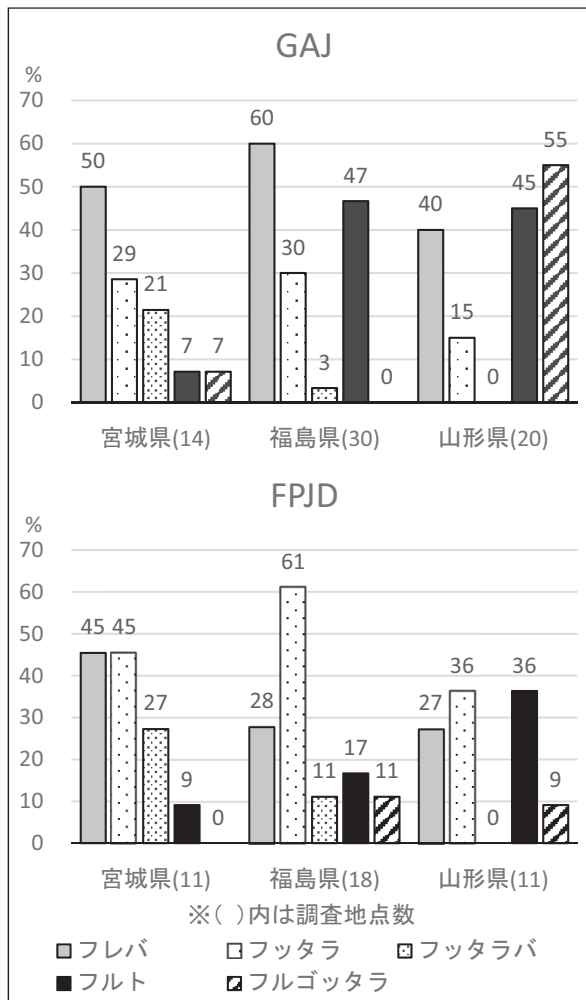


図3 東北地方南部の条件表現形式

けての地域においても、その内部と隣接地域で、タラ類が他の形式に代わって受容されるプロセスが進行している。

4. 文法項目の接触変化における言語的威信と体系性の影響

このように、近畿地方を中心とした西日本と、東北南部から東関東にかけ

ての東日本で、バ類をはじめとした既存語形と交替する形で、タラ類の伝播・受容が進行している。地理的分布の状況から、どちらの地域でも、接触によって変化が生じていると見ることができる。

条件表現のように緊密な体系性を持つ言語項目における接触変化を考える際には、言語地理学的な接触伝播の際に一般的に留意される、方言間の優劣関係（言語的威信の高低）だけでなく、当該の言語要素が言語体系内でどのような位置を占めているかという、体系的な観点が必要である。この観点からは、複雑な項目から単純な項目に置き換わる、という変化が起きやすいと言える。

日高(2016)は、GAJ と FPJD の反事実的条件文「きのう手紙を書けば良かった (GAJ128) / 間に合ったのに (FPJD G-047)」の分布図を比較して、西日本におけるタラ類の拡大を指摘し、その変化を、近畿型の条件表現体系の周辺方言への受容と位置づけている。ここで「近畿型の条件表現体系」と言われているのは、表3 (表2を簡略化・FPJD の結果を加味) のように、タラ類を広い意味・用法で専用し、バ類・ト類を用いない体系のことである。

表3 条件表現の基本形式の地理的分布

		中国・ 四国南西部	近畿・ 四国北東部	中部	関東	東北南部
反事実的条件文		バ	タラ・(バ)	バ	バ	バ・ト
予測的 条件文	文末 述べ立て	バ	タラ	バ	バ	バ・ト・〈タラ〉
	文末 命令	タラ	タラ	タラ	タラ	タラ
	後件 避けたい事態	ト・バ	タラ・(ト)	ト・バ	ト	ト
事実的条件文		タラ	タラ	タラ	タラ	タラ・〈タツケ〉

※ 複数の形式が使われている場合は、優勢な形式を先に掲出
※FPJD で()内の形式は減少、〈 〉内の形式は増加
日高 (2016) 表1.2.1 を改変

このような近畿型の条件表現体系は、周辺方言に比して単純化の進んだ体系である。したがって、言語的動機付けによる変化の方向性として、この単純な体系が周辺の複雑な体系に受容されていくことが予想される。これは具体的には、反事実的条件文 (GAJ128 / FPJD G-047) でも基本的な予測的条件文 (GAJ167 / FPJD G-045) でも、バ類・ト類と交替する形でのタラ類の

増加として現れている。

一方東日本の東北地方南部から東関東にかけての地域は、近畿型の条件表現体系と直接接触过しているわけではない。また基本的な予測的条件文ではタラ類が増加しているが、反事実的条件文ではタラ類の増加はほとんど見られない。したがってここでは、現在検討している基本的な予測的条件文に即した体系的背景を措定する必要がある。

予測的条件文に使われる形式について見ると、共通語では、(1)のように、主文が述べ立ての文では「ば」「と」「たら」のいずれも使用可能であるが、主文が命令文の用法(2)では「ば」「と」を使用することができず(文末のモダリティ制限)、後件が望ましくない事態で文全体がそれを避けた方がよいという伝達の意味を持つ場合(3)には「ば」を使用することができない(語用論的制限)。「たら」はこれらすべての文に使用できる。

(1) あした雨が {降れば／降ると／降ったら} 船は出ないだろう。

(GAJ167/FPJD G-045) (基本的な予測的条件文、文末：述べ立て)

(2) そこに {×行けば／×行くと／行ったら} 電話をしろ。(FPJD G-049)

(予測的条件文、文末：命令)

(3) おまえが {×行けば／行くと／行ったら} その話はだめになりそうだ。

(GAJ169/FPJD G-048) (予測的条件文、後件が望ましくない事態)

東北南部方言や関東方言、近畿周辺部方言でも、バ類、ト類には同様の制限がある。その中で(1)の文でバ類、ト類ではなく、タラ類を使用するようになるということは、汎用性の高いタラ類を採用することで、予測的条件文を担う形式を整理・単純化する変容ということになる。この小さな体系の単純化は「近畿型の条件表現体系」の一部でもあるが、東日本のタラ類の増加に関しては直接的な動機であると考えられる。

なお日高(2016)は、西日本における動態について、趣旨次のように結論付けている。

結論1 当該の隣接する方言どうしが共通の言語文化圏の範囲内にあれば、社会的な威信による影響力がある場合はもちろん、ない場合でも、単純な体系である近畿型の条件表現体系は、言語的動機付けのみで周辺

方言に受容される。

結論 2 逆に共通の言語文化圏の範囲内になれば、社会的動機付けはもちろん、言語的動機付けも働かない。つまり近畿型の条件表現体系は受容されない。

予測的条件文の西日本におけるタラ類の分布の変化の状況は、反事実的条件文とほぼ同じであるので、「結論 1、2」は、西日本に関しては、予測的条件文にも当てはめることが可能であるが、東日本についてはどうか、次節で検討する。

5. タラ類増加の背景

以上を踏まえて、基本的な予測的条件文における、タラ類増加の背景について考察する。西日本と東日本のタラ類は、いずれも、単純な体系への移行という言語的動機付けを主要な動因としながら、強い言語的威光を持つ近畿中央部方言を中心とする西日本と、分布域内にそのような方言のない東日本で、やや異なる受容のされ方をしたと考えられる。

まず西日本の分布について。近畿地方を中心としたタラ類は、分布が連続的にまとまっていて、外周が明確なはっきりとした分布域を持っている。これは、東日本のタラ類の分布域と異なる特徴である。近畿地方を中心とした地域では、いち早く単純な体系に移行した近畿中央部方言の強い威信の影響で、タラ類は一定の圧力をもって伝播し、受容が促されたと推測される。日高(2016)のいう「共通の言語文化圏」(4節「結論 1、2」)の形成も、直接・間接にこの威信方言の影響の及ぶ範囲であると思われる。

一方東北地方南部から東関東の太平洋側のタラ類は、他の語形と混在しており、特にGAJにおいては、連続的なまとまった分布域が見出しにくい。この地域におけるタラ類の発生地ははっきりしないが(1箇所ではない可能性もあるだろう)、GAJの分布と中核都市性からみて、一つの可能性として宮城県仙台市あたりであることが考えられる。もしそうであったとしても、仙台の影響力は西日本における近畿中央部方言に及ぶものではない。したがってこの地域では、タラ類は、言語的威信によらず、単純な体系への指向とい

う言語的動機付けにのみによって、徐々に受容されたものと推測される。連続的で密な分布域が見られないのは、西日本と異なるこのような形成過程を反映するものと考えられる。

ただし、日高の言う「共通の言語文化圏の範囲内」での伝播・受容はここにも認められる。3節に挙げた、FPJD で新たにタラ類が使用されるようになった地域のうち、(a)宮城県北部・岩手県南部、(b)山形県内陸部、(c)福島県浜通りはいずれも南奥方言地域内、(d)栃木県西部は東関東方言地域内である。この範囲内では、タラ類は急速に受容されているように見受けられる。一方、福島県会津地方から方言区画の異なる新潟県側には、積極的には伝播・受容が進行していないようである。

なお、当該地域に対して強い影響力を持つ方言として首都圏方言がある。予測的条件文では、周辺方言である東北地方南部・東関東方言の方が、威信方言である首都圏方言より、体系の単純化が進んでいることになる。この関係はタラ類の受容を押しとどめる力として働く可能性があるが、実際はそのような影響力はうかがわれない。東関東の茨城県、千葉県で、タラ類があまり増加していないのは、首都圏方言が抑制力として働いているためとも見ることもできるが、それよりも単に、変化が先行している東北南部方言から距離的に離れていて、タラ類への接触機会が少ないためと考えてよいだろう。むしろ、(e)に挙げたように、FPJD では千葉・埼玉・東京都県境にタラ類が現れている。東京のタラ類については、関西方言との接触の影響も考慮しなくてはならないが、「違う」の形容詞型活用が新方言として東関東方言から東京に流入したように(荻野他1985)、タラ類との接触機会が、首都圏北東部で高まっているとすれば興味深い。⁽⁴⁾

6. 大分県国東半島周辺地域のテカラ類

基本的な予測的条件文における西日本と東日本のタラ類の増加は、いずれも主として、体系の単純化という動機を背景にした、接触による言語変容と位置づけられた。一方で言語の体系変化は、当初は言語内的な変化として生じるものである。接触による変容の場合も、単にある形式を模倣によって取

り入れるのではなく、新たな体系の一部である新形式や用法に接触することで、体系の単純化という内的変化が促進されるという面があると考えられる。ここでは、大分県国東半島周辺地域のテカラ類を取り上げ、この地域において、近畿型の条件表現体系と類似の体系が独自に形成されつつあると見られることについて述べる。

図2のFPJDの地図では、福岡県東端部から大分県にかけての国東半島周辺に「フツテカラ」という語形が3地点見られる（福岡県豊前市、大分県中津市、豊後高田市）。これは、図1のGAJでは現れていない語形である。この地域の方言では中央語の「テ」が「チ」に対応するので、この語形は「降ってから」に当たる。

黒木(2008)は、大分県日田市方言の「テカラ」の用法を記述している。それによると、日田方言の「テカラ」は、連用形接続の接続助詞で、形式的には共通語の「てから」と同じであるが、用法は格段に広く、むしろ共通語の「て」に近いという。その多岐にわたる用法の中に、(4)(5)のような時間的關係や原因・理由を担う従属節の用法が示されている。しかし(6)のような予測的条件文の用法は挙げられていない。

(4) お風呂に入ッテカラ、ビールを飲んだ。

a. お風呂に入って、そこでビールを飲んだ。(同時)

b. お風呂に入ったあと、台所かどこかでビールを飲んだ。(継起)(共通語と同じ意味)

(5) 砂糖を入レスギテカラ、ものすごく甘い。(原因・理由)

(6) あした雨が降ッテカラ、船は出ないだろう。(予測的条件文)

FPJDの日田市の回答は「フリヤー」で、バ類が使われている。テカラ類の用法には地域差があると見られる。また、予測的条件文のテカラ類はGAJには見られずFPJDで現れたことから、30年の間に生じた新しい用法である可能性がある。

テカラ類の用法の地域差と時代差を見るために、表4として、GAJとFPJDのすべての条件表現の調査項目で1項目でもテカラ類を使用している地点をすべて抜き出し、各用法で回答された条件表現形式を挙げる（日田市

は参考地点)。調査地点は、GAJ、FPJD それぞれに、テカラ類が回答された用法が多い地点順に左から右へ配列し、用法数が同じ場合は西から東に挙げた。各用法の調査文は次のとおり。〈 〉 内の番号は表中の用法番号と対応する（2節と重複するが、取り上げる調査文と配列が一部異なるので再掲する）。

- 〈1〉 GAJ 128図「きのう手紙を書けばよかった」（反事実的条件文）
- 〈1〉 FPJD G-047「きのう手紙を書けば間に合ったのに」（反事実的条件文）
- 〈2〉 GAJ 167図/FPJD G-045「あした雨が降れば船は出ないだろう」（基本的な予測的条件文、文末：述べ立て）
- 〈3〉 FPJD G-049「そこに行ったら電話しろ」（予測的条件文、文末：命令＝共通語では「ば」「と」「なら」が使えない）
- 〈4〉 GAJ 168図「あした雨が降ったらおれは行かない」（予測的条件文、文末：意志表現）
- 〈5〉 GAJ 169図/FPJD G-048「おまえが行くとその話はだめになりそうだ」（予測的条件文、後件が望ましくない事態で文全体が〈回避の必要性〉の伝達の意味＝共通語では「ば」「なら」が使えない）
- 〈6〉 GAJ 225図/FPJD G-094「そっちへ行ってはいけない」（予測的条件文、文全体が〈禁止〉の伝達の意味＝共通語では「ば」「と」「なら」が使えない）
- 〈7〉 GAJ 170図/FPJD G-050「そこに行ったらもう会は終わっていた」（事実的条件文、前件も後件も過去の一回的なできごと）
- 〈8〉 GAJ 133図/FPJD G-051「手紙を書くなら、字をきれいに書いてくれ」（認識的条件文 非過去）
- 〈9〉 FPJD G-052「二日前に出したなら、そろそろ届くはずだなあ」（認識的条件文 過去）

表4から、調査地点数自体はGAJの方が多くにもかかわらず、テカラ類を使う地点はFPJDの方が多く、GAJのテカラ類の用法は予測的条件文の一部に限られているのに対し、FPJDではきわめて広い用法でテカラ類を使用する地点があること、がわかる。テカラ類は30年の間に地域と用法の両面

表4 テカラ類の使用地点と用法

			用法 番号	GAJ		
				福岡県 新吉富村	宇佐市	大分県 安岐町
反事実的条件文			(1)	バ類	バ類	バ類
			(2)	バ類	バ類	バ類
予測的 条件文	(文末 制限)	文末命令	(3)	FPJDのみ		
		文末意志	(4)	テカラ類	タラ類	バ類
	(語用論 的制限)	避けたい後件	(5)	*	ト類	テカラ類
		禁止	(6)	テカラ類	テカラ類	テワ類
	事実的条件文		(7)	タラ類	タラ類	タラ類
認識的条件文			(8)	(ン)ナラ類	バ類	(ン)ナラ類・G類
			(9)	FPJDのみ		

用法 番号		FPJD							
		福岡県 豊前市(8)	山香町(5)	中津市(4)	豊後高田市(3)	大分県 安岐町(3)	三重町(1)	佐伯市(1)	日田市(0)
(1)	(2)	バ類 テカラ類	バ類	バ類 テカラ類	バ類	バ類	バ類	バ類	バ類
(2)	(4)	バ類 テカラ類	バ類・タラ類	バ類 テカラ類	バ類 テカラ類	バ類・タラ類	バ類・タラ類	バ類	バ類
(3)	(7)	テカラ類	テカラ類	テカラ類	テカラ類	テカラ類	バ類・タナラ テカラ類	タラ類 テカラ類	タラ類
(4)		GAJのみ							
(5)	(5)	テカラ類	テカラ類	バ類・ト類 テカラ類	バ類 テカラ類	ト類 テカラ類	バ類・ト類	ト類	バ類
(6)	(3)	テカラ類	テワ類 テカラ類	テワ類	テワ類 テカラ類	テワ類 テカラ類	テワ類	テワ類	テワ類
(7)	(2)	タラ類 テカラ類	テカラ類	タラ類	タラ類	タラ類	タラ類	タラ類	タラ類
(8)	(1)	(ン)ナラ類 シジャッチテカラ	(ン)ナラ類・G類	G類	(ン)ナラ類	(ン)ナラ類・バ類・G類	(ン)ナラ類・G類	(ン)ナラ類	(ン)ナラ類
(9)	(1)	タンジャッチテカラ *		タ(ン)ナラ類	タ(ン)ナラ類	タ(ン)ナラ類	*	*	タ(ン)ナラ類

- ・バ類には「フリーヤ」等の融合形を含む * = 条件表現形式を用いない回答 G類=ゴタレバ類
- ・地固化の際に「その他」とした語形も、条件表現形式を用いた回答であれば掲出した(例:山香町の(2) フッチョッチテカラ)
- ・()内の数字は、テカラ類の地点数、用法数

で拡大したようである。

この表から、テカラ類の用法の拡大がどのように進行したかを見ていく。

GAJのテカラ類を使用する地点では、テカラ類は予測的条件文だけに使われているが、文末が述べ立ての文<2>(基本的な予測的条件文)はバ類で表され、テカラ類は、文末が意志表現であったり<4>、後件が望ましくない事態で文全体が「回避の必要性」<5>や「禁止」<6>といった伝達の意味を持つ場合に限って現れる。これらの文は共通語では「ば」が使えないかまたは使いにくい、この地域のバ類も同様の制限を持っていると見られる。テカラ類はそのような制限を避ける形式として、共通語等のタラ類と同じように使われている。表を見ると、この地域のタラ類は、前件も後件も過去の一回的なきごとである事実的条件文<7>を担う形式として、安定して使われているようである。このことは、この地域の在来タラ類が、「未然形+ば」の「たらば」ではなく、「已然形+ば」の「たれば」由来のものであることを推測させ

る。そのため、前件・後件とも未実現の事態である予測的条件文には使いにくく、別の形式が必要とされたものと考えられる。

FPJD でテカラ類が回答された地点は7地点ある。一つの用法のみで使用する地点から、8つの用法で使用する地点まで、大きな幅がある。用法の分布を拡張過程の反映であると見ると、用法の狭い地点から広い地点へその内容を順に見ていくことで、テカラ類の用法の拡張のプロセスをたどることができると考えられる。

諸用法のうち、GAJ では調査されなかった、文末が命令文の予測的条件文〈3〉では、FPJD でテカラ類を使用するすべての地点でテカラ類が使われている。この用法は、黒木(2008)が挙げている「テカラ」の諸用法のうち、前件と後件の事態の時間的近接を表す(4a)に近い。このように在来方言の中に近い用法が見いだされること、および、この用法がテカラ類を用いるすべての地点に共有されていることから、〈3〉の用法が、テカラ類の条件表現用法の起点であると推測される。

用法の最も狭い佐伯市と三重町では、文末が命令文の予測的条件文〈3〉のみでテカラ類が使われている。3用法で用いる安岐町では語用論的制限のある文〈5〉〈6〉が加わる。ここまではGAJの3地点の用法の範囲内と見なせる。次の段階からは、バ類の使用制限のある予測的条件文以外に用法が拡張する。豊後高田市では、文末が述べ立てでバ類の使用制限のない基本的な予測的条件文〈2〉、中津市では反事実的条件文〈1〉、山香町では事実的条件文〈7〉、そして福岡県豊前市では、準体助詞ンと断定辞ジャを介する形で認識的条件文〈8〉〈9〉にまで用法が拡張した。

用法の拡張の結果、豊前市では主要な用法すべてでテカラ類が使われるようになっていく。これは、4節で見た「近畿型の条件表現体系」に極めて近い体系である。テカラ類が早い段階から使われていたと見られる、バ類の使用制限のある予測的条件文〈3〉〈5〉〈6〉は、テカラ類専用であるものの、その他の用法ではバ類、タラ類等と併用されているので、最終的な単純な体系とはなっていないが、すべての条件文に使用できるという点で、豊前市方言のテカラ類は、近畿中央部方言のタラ類と同様の用法を獲得したことになる。

以上では、FPJD の共時的な用法分布から拡張のプロセスを推定した。一方実時間の変化としては、安岐町の GAJ と FPJD の回答、および、GAJ の福岡県新吉富村と FPJD の豊前市（両者は隣接自治体）の回答を比較することで、30年間の変化を知ることができる。安岐町は、GAJ から FPJD にかけて、バ類の使用制限のある予測的条件文（〈3〉～〈6〉）の範囲内で用法を広げている。新吉富村では GAJ ですでにバ類の使用制限のある予測的条件文〈4〉〈6〉ではテカラ類が専用されており、その後、FPJD の豊前市の広い用法まで拡張が急速に進んだと見られる。

以上のように、国東半島周辺地域のテカラ類は、従来「前件と後件の事態の時間的近接を表す」という用法を持っていたことから、まず、①バ類の使用制限のある予測的条件文で制限を回避する形式として使用され、次に、②バ類が使われている基本的な予測的条件文と反事実的条件文でバ類と併用される形で使用されるようになり、最後に、③バ類の使われない条件文である事実的条件文と認識的条件文にも使用される、という方向で、条件表現形式としての汎用性を高める過程にあると推測される。このような変化の動機付けは、近畿型の条件表現体系への変化と同じく、言語体系の単純化と考えられる。この地域では、言語内的な変化によって独自の単純な条件表現体系が形成されつつあると見ることができる。

7. おわりに

順接仮定の条件表現を担う形式は、中央語においては、古典語の「未然形＋ば」から「已然形＋ば」へと移行すると同時に、中世以降様々な形式が分化して現在に至っている。方言においても、表2の条件表現形式の全国的地域差に示したように、少なくとも GAJ 段階では、多くの方言で、同一地域内で複数の形式が意味用法を分担して使い分けられる状況にある。しかし今回取り上げた基本的な予測的条件文で見出されたのは、タラ類、テカラ類といった特定形式の意味用法の汎用化、体系の単純化といった、分化よりも統合の方向に向かう傾向である。このような変化の方向は条件表現体系全般に及ぶのか、あるいは、別のタイプの条件文においては異なる傾向があるのか、今

後他のタイプの条件文についても経年比較を行い、方言の条件表現体系全体についての見通しを得ていきたい。

参考文献

- 大西拓一郎・鎌水兼貴・三井はるみ・吉田雅子（2011）『方言の形成過程解明のための全国方言調査 方言メール調査報告書』国立国語研究所共同研究報告10-02
- 大西拓一郎編（2016）『新日本言語地図』朝倉書店
- 荻野綱男・井上史雄・田原広史（1985）「周辺地域から東京中心部への〈新方言〉の流入について」『国語学』143, pp.74-65
- 金澤裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 黒木邦彦（2008）「大分県日田市方言における「-てから」の用法 —「-て」「-きー」「-けんど」「-けどが」との比較をとおして—」『阪大社会言語学研究ノート』8, pp.89-100
- 国立国語研究所（1989-2006）『方言文法全国地図』1～6、国立印刷局（pdf版：http://www2.ninjal.ac.jp/hogen/dp/gaj-pdf/gaj-pdf_index.html）
- 日高水穂（2003）「条件表現「すれば」「したら」「すると」」野田春美・日高水穂『現代日本語の文法的バリエーションに関する基礎的研究』pp.81-94, 科学研究費研究成果報告書
- 日高水穂（2016）「「接触」による方言分布形成」大西拓一郎編『空間と時間の中の方言』朝倉書店, pp.21-38
- 日高水穂（2017）「認識的条件文の地理的変異の類型」有田節子編『日本語条件文の諸相』pp.159-184
- 方言文法研究会（2010）『『全国方言文法辞典』のために条件表現・逆接表現調査ガイドブック』科研費21320086研究成果報告書
- 三井はるみ（2009）「条件表現の地理的変異－方言文法の体系と多様性をめぐって－」『日本語科学』25, pp.143-164
- 三井はるみ（2010）「条件表現の全国分布概観」方言文法研究会（2010）, pp.13-25
- 三井はるみ（2016）「95降れば、96起きれば、97書けば、98行くと、99行ったら、100行ったら、101書くなら」大西拓一郎編（2016）, pp.190-203
- 矢島正浩（2013）『上方・大阪語における条件表現の史的展開』笠間書院

注

- (1) 以下、近畿地方を中心としたタラ類の周辺方言への伝播・受容、バ類、タラ類併用からバ類専用への変化については、日高(2016)が、反事実的条件文「きのう手紙を書け

ば良かった（GAJ128図）/間に合ったのに（FPJD G-047）」の分布の変化について指摘している状況とほぼ同じである。ただし比較すると、反事実的条件文より本稿で取り上げている基本的な予測的条件文の方がタラ類の分布域がGAJ、FPJDともに少し広く、GAJでの分布域内のバ類との併用が少ない。つまり、基本的な予測的条件文の方がタラ類の伝播・受容が進行している。また、基本的な予測的条件文に見られる東日本のタラ類の分布は、反事実的条件文にはほとんどない。

- (2) GAJとFPJDは調査地点および地点数が異なるため、地図上では全体の変化を把握しにくいことがある。そのような場合グラフによる表示も有効である。ただし特にFPJDでは一県の調査地点数が10台と少ないので、数値の読み取りには注意が必要である。
- (3) ゴッタラ類の減少については、予測的条件文と認識的条件文を担う形式の分化の観点からもとらえる必要がある。
- (4) タラ類が東京で受容されると、次の段階として、共通語として全国に受容されやすくなることが予想される。実際、大西他(2011)の全国の大学生を対象としたメール調査の結果では、FPJDでタラ類がほとんど見られない関東・中部地方と九州地方でもタラ類が優勢になっており、分布が大きく変化していることがうかがわれる。

付記

本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国方言調査」、および、JSPS 科研費（26244024）による研究成果の一部である。